## アフリカンキッズクラブ(AKC)リレーエッセイ\_\_第3回

## ナイジェリアと日本のミックスとして

## Living as a mixed Nigerian and Japanese

エバデ・ダン 愛琳

Irene Evbade-dan

私は自己紹介が苦手でした。いつも明らかに他の人よりも多くの情報を伝えなくてはいけなかったからです。周りの人と同じように名前と所属くらいにとどめたとしても、「どこから来たの?」「日本に住んで長いの?」「お父さんはどこの方なの?」と、根掘り葉掘り聞かれることは避けられませんでした。

ナイジェリア人の父と日本人の母の間に長女として 生まれた私は、田舎で育ったということもあり、自分 が周りの人と明らかに違うということを早い段階で認 識していました。なんとなくみんなと体つきが違う、 肌の色は明らかに違う、髪の毛も直毛ではない。もと もと負けず嫌いな性格でしたが、それでも何とかして 周りに溶け込むことが最優先でした。テレビや雑誌な どで見るのは、みんな私とかけ離れた見た目の人たち で、まれに見かけたとしても男性ならボディーガード か悪役、女性ならゴスペルシンガーなどの決まった役。 同じ肌色の人はこういう仕事にしかつけないのかな あ、と感じていました。

あの頃は、一人でも「この人は私と同じだ」と思えるような大人がいればなあ、と何度も思いました。周りにいる大人は、私からすれば別の世界の人でした。日本語ができないと思われないように漢字テストで悪い点をとらないように努力したり、英語は話せて当たり前でしょという周りからのプレッシャーに耐えて、実際は家庭内でほとんど使わなかった英語を一生懸命勉強したり、何時間も座って頭皮が焼けるような思いをしながら縮毛矯正をかけ続けたことは、この人たちには分からないんだ、そう自分に言い聞かせてきました。その一方で、やっぱり誰かに分かってほしいし、思い切り話したいという気持ちも強くなりました。勇

気を出して誰かに話せば、決まって「それは君がおかしい」とか「考えすぎだよ」と言われてきました。どうせまた否定されるんだ、もしかしたら本当に私がおかしいのかもしれない、と考えるようになり、だんだん悩みを打ち明けることが怖くなって、自分の気持ちをため込むことに徹しようと決めました。

そんなこんなで小中高校と過ごし、高校の恩師が「あなたと同じような経験をした人がたくさんいるよ」といって薦めてくださった東京の大学に進学することになりました。やっと自分と似たような境遇にある同世代と会える、と思うと胸がわくわくしました。入学してから、それまでは想像もできなかったような世界で、幅広い人たちと知り合うことができました。中には私のように両親が国際結婚をした人もいます。彼らとの会話の中で、もちろん共有できるところもたくさんありました(食事に行けば必ず英語のメニューが出てきたり、電車でやたらじろじろ見られたり)。同じミックスの人と会うときは常にそのようなあるある話を



8歳の筆者 (中央)。二人の弟(当時、6歳と3歳)と一緒に 2004年

**えばで・だん あいりん** 上智大学総合グローバル学部4年、国際政治専攻。ナイジェリア人の父と日本人の母の間に生まれ、岐阜県で育つ。大学入学を機に上京。アフリカンキッズクラブ(AKC)でのインターンは3年目に入る。

AKC のサマーキャンプ実施への寄付を募るクラウドファンディング Readyfor に挑戦しています(2017月5月26日~7月25日)。 http://readyfor.jp/projects/africankidsclub



グローバルフェスタ JAPAN2016 の会場にて 東京・お台場 2016年10月

し、そうでない人と話すときも必ずその話題に触れます。しかし、だんだん自分が"日本とナイジェリアのミックス"だけで完結してしまっているのではないかと焦燥感を抱くようにもなりました。二つのバックグラウンドを持つことはわたしの中で大きなウエイトを占めてきたけれど、それが全てではないと、ようやく自分で気づきました。

アフリカンキッズクラブ(AKC)と出会ったのもそのころです。私のように2つ、あるいはそれ以上のバックグラウンドを持ちながら日本で生活している子どもたちと触れ合える機会はなかなかありません。自分が幼いころにずっと望んでいた「自分と似ている年上の人」に私自身がなれるチャンスだと思いました。AKCを通して日本ではないもう一つのバックグラウンドについて学び、似たような境遇の子どもたちとそれを共有し、誇りに思ってもらえれば幸いです。同時に、子どもたちに、そしてAKCに携わるすべての人に、ミックスであることは彼らの中での共通点ではあるけれど、その捉え方は個々に異なっていて、さらに言えばそれは彼らの一部であり全てではない、ということに気付いてもらえればと思っています。

AKC に携わって2年が経ちました。子どもたちを見ていると、まるで同じ年のころの自分を見ているように感じます。あの頃の私だったらこうしてほしかった、こういう機会があればいいと思っていた、など当時の自分と照らし合わせながら企画を考えたり実施したりしてきました。いまでは年に4~5回のイベントに各回20名程の子どもたちが集まってきます。その度に、子どもたちには自分が一人でないということを感じてもらえればと思っています。また、普段はあまり話す機会がないかもしれない日本ではない方の自分のバック



アフリカンキッズクラブのピクニックにて 東京・水元公園 2016年11月

グラウンドについて、中高生であれば進路についても、 気兼ねなく話せるような場を目指して、活動に携わっ ています。

AKCを通して、もう一つ思いがけないことを知ることができました。それは親御さんの気持ちです。私は自分が幼かった頃、両親に対して複雑な感情を抱いていました。仲のいい家族なので、両親のことが大好きだったし、尊敬もしていました。しかし、それと同時に当時は、二人は望んでお互いと結婚して、自分の選択で日本に住むことを決めたのだから、必ずしもこの身体とバックグラウンドに生まれることを望んだわけではなかった私の悩みは分からないのだ、という気持ちも入り混じっていました。もちろん、それを親に直接伝えたことはなかったですが、日々の行動や言動に表れていたのかなあと思います。

いまは21歳になり、ちょうど子どものころの私と当時の両親の年齢との間あたりになって、子育て真っ最中のお母さんたちの話をかたわらで聞いていると、うちの両親もこういうことで悩んでいたのかなあと感じます。私が誰にも相談できなかったことと同じように、きっと両親もそんな私をみて辛い思いをしただろうし、そういう悩みを抱えていた子をもつ親としての悩みを相談する場があまりなかったのではないかと思います。だからこそ AKC は、子どもたちだけでなく保護者にとっても思いを共有できるプラットフォームになっていくことができれば、と思っています。

AKC はだんだん大きくなってきていると思います。 より多くのキッズたち、そして保護者の方々にこのコ ミュニティの存在を知ってもらい、気軽に参加しても らえるようになっていくよう今後も貢献していきたい です。